

# 4.

## 特別招聘教授 プロジェクト

2016 年度特別招聘教授  
プロジェクト概要

スーザン・D・ハロウェイ特別招聘教授

エリカ・バッフェツリ特別招聘教授

ラウラ・ネンツィ特別招聘教授

## ▶ 2016 年度 特別招聘教授プロジェクト概要

---

### 国際的な研究者とのダイレクトな交流

「特別招聘教授プロジェクト」はジェンダー研究所の重要な事業のひとつであり、その主な目的は、グローバルな視野から本学のジェンダーに関する教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることである。具体的には、海外の著名な研究者を招聘し、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウムの企画・登壇を含む国際的な研究ネットワークの構築、大学院生を対象としたセミナー等での講義による国際レベルのジェンダー研究教育プログラムの実施に貢献していただいた。2016 年度は、スーザン・D・ハロウェイ氏（カリフォルニア大学バークレー校教授）、エリカ・バッフェツリ氏（マンチェスター大学准教授）、ラウラ・ネンツィ氏（テネシー大学教授）の3名を招聘した。

ハロウェイ氏は発達心理学と教育学が専門であり、ジェンダー、家族、幼児教育、心理などの多角的視点から日本およびイタリアで研究活動を行い、研究成果を単著や論文により発信している世界的に著名な研究者である。特に、*Contested Childhood: Diversity and Change in Japanese Preschools*（2004 年）は『ヨウチエン：日本の幼児教育、その多様性と変化』と和訳され、日本の幼児教育と家族研究者にとっては必読の書籍である。

本学採用期間中（2016 年 5 月 22 日～6 月 29 日）には、自身の研究プロジェクトである「The Changing Contexts of Family Life and Early Childhood Education and Care (ECEC) in Japan」を進めるために複数の研究会を持ち、共同研究者との論文執筆を行った。加えて、本学附属幼稚園、いずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学子ども園を訪問し、関係者との意見交換を行った。さらに、ハロウェイ氏には 2016 年 6 月 9 日開催の国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較 (Family, Work, and Well-Being in International Perspective)」を企画していただいた。少子化や子育てなど、現代の日本社会が直面する課題が取り上げられ、「幸福」や「ウェルビーイング」などの概念にも踏み込んだ先進的なシンポジウムであった。また、2016 年 6 月 16 日に本学の教員と大学院生を対象とした IGS セミナーで「Family and Schooling in Contemporary Japan: Foreign Perspectives and Research」（現代日本における家庭と学校教育:外国人研究者の視点と研究）と題する講義をしていただいた。

バッフェツリ氏の専門は東アジア研究で、特に近刊の *Media and New Religions in Japan*（Routledge）に代表される日本の新宗教とメディア・インターネットの関係に関する研究では、世界的に関心を集める成果をあげている。本学採用期間中の 2016 年 9 月 21 日～12 月 20 日には、日本の新宗教に関する新たなプロジェクトを立ち上げ、二つの宗教団体へのフィールドワークを実施した。バッフェツリ氏には 2016 年 10 月 19 日（水）開催の、国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考 (Women, Religion and Violence in International Perspective)」の企画を担当していただいた。また、2016 年 12 月 14 日（水）には「Finding Your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions（立ち位置を理解する:日本の新宗教フィールドワークからの考察）」と題する講義を IGS セミ

ナーとして大学院生・教員対象に行っていただいた。また、これらのイベント実施に加えて、フィールドワーク調査、研究会出席、マンチェスター大学から日本に留学している学生のサポートも含めた様々な活動を、精力的にこなしていた。

ネンツィ氏の専門領域は近代日本史で、これまで江戸時代末期の女性たちに焦点を当て、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近刊の *The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko* (ハワイ大学出版) は、歴史学のみならず、ジェンダー研究者からも、日本の女性史についての理解を深めることにつながったとの高い評価を得ている。

本学における採用期間中(2016年10月3日～2017年7月31日)には、日本の近世、徳川社会に焦点を当てた新規のプロジェクト「After Dark: The Nighttime in Nineteenth Century Japan (日暮れ後：19世紀日本の夜)」に取り組んだ。ネンツィ氏には、2017年1月17日(火)開催の、国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎 (Gender, Religion, and Social Reform in the Meiji Period: The Case of Sumiya Koume and Nakagawa Yokotarō)」を企画していただいた。また、ネンツィ氏が企画・運営した英語による IGS セミナーは2回開催された。さらに、2016(平成28)年度後期の、博士前期課程比較社会文化学専攻歴史文化学コース「歴史資料論特論」を担当していただき「Gender Issues in Tokugawa Period (徳川時代のジェンダー課題)」をテーマとした英語による講義を行っていただいた。

三氏とも、シンポジウムやセミナーでは、進行中のプロジェクトからの成果を発表してくれるなど、最先端の知見を本学の教育現場で披露してくれた。また、三氏に企画していただいた国際シンポジウムおよび IGS セミナーでは、参加者との間で活発な意見が交換された。世界的に著名な研究者との直接的な意見交換により学びを深化させる機会を本学の研究者に提供できたことは、特に将来を担う若手研究者にとって、今後の研究指針を手にする貴重な機会となったであろうと評する。本特別招聘教授プロジェクトを通じて、当初の期待以上の成果がもたらされ、本学におけるジェンダー研究に、グローバルかつ学際的な最先端の知見を提供し、同時に、教育研究活動の活性化をもたらすことができた。

## スーザン・D・ハロウェイ特別招聘教授プロジェクト実施概要

### 【招聘事業目的と期待される成果】

グローバル女性リーダー育成研究機構に設置されたジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施と、国際的な研究ネットワークの構築を推進する。特別招聘教授はこの両方に寄与する者であり、本学におけるジェンダー研究に、グローバルで学際的な最先端の知見を提供し、教育研究活動の活性化をもたらすことが期待される。

世界的に著名なスーザン・D・ハロウェイ教授の専門領域は発達心理学と幼児教育で、これまで日本の母親に注目して、文化的な文脈のもとでの分析を行い、子育てと家庭生活に関する多くの研究実績を挙げている。また、ジェンダー視点からのシングルマザーに関する研究成果も広く知られている。ハロウェイ教授の単著のうち2冊は和訳され、日本でも多くの読者を得ている。本学では、ジェンダー視点からの家族・子ども研究が盛んであることから、ハロウェイ教授の招聘は、本学の研究者・院生にとって大変刺激的であり、多くのことを学ぶ機会を提供することが可能である。

### 【スーザン・D・ハロウェイ特別招聘教授プロフィール】



カリフォルニア大学バークレー校大学院教育学科教授。研究分野は家族と学校教育の文化的側面からの分析。1983年にスタンフォード大学で博士号を取得の後、メリーランド大学カレッジパーク校、ハーバード大学大学院、カリフォルニア大学バークレー校等での教育研究職を歴任している、経験豊富な研究者である。研究成果として単著2冊、共著1冊を刊行しているほか、査読付き学術誌等での論文発表は80本を超えるなど、顕著な業績を挙げている。フルブライト奨学金を二度にわたって獲得し、日本およびイタリアで国際的な研究活動を行っている。日本の研究者との共同研究による日米比較研究も数多く手掛け、国際的な研究連携を積極的に進めている。研究視点は、ジェンダー、家族、幼児教育、心理、障がいなど多角的である。1980年代から日本におけるフィールドワークを多数実施し、1990年代半ばに行った関西地方の幼稚園での調査を中心とする研究の成果書籍 *Contested Childhood: Diversity and Change in Japanese Preschools* (邦題『ヨウチエン：日本の幼児教育、その多様性と変化』2004年、北大路書房) は、日本の幼児教育関係者に広く読まれている。2000年からは日本の母親たちを対象にした調査を実施し、その成果は *Women and Family in Contemporary Japan* (邦題『少子化時代の「良妻賢母」：変容する現代日本の女性と家族』2014年、新曜社) として刊行されている。近年は、多文化社会での教育のありようや、同性カップルの子育てなど、今日的なテーマに積極的に取り組んでいる。

【採用期間】 2016年5月22日～6月29日

### 【職務内容およびその支援】

ハロウェイ教授に依頼した業務は、1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進、2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加、3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告、および 4) 上記活動についての成果報告の 4 項目であるが、これに加えて、ジェンダー研究所を拠点とする国際的研究ネットワークの構築にも参与しているほか、本学附属幼稚園およびいずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園を訪問し、関係者との意見交換を行った。

在職中の業務支援については、石井クンツ昌子ジェンダー研究所長が、シンポジウムおよびセミナーの企画運営と国際ネットワーク構築関連で協力したほか、ジェンダー研究所スタッフが事務業務の支援を担当した。

### 【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクト「The Changing Contexts of Family Life and Early Childhood Education and Care (ECEC) in Japan」（日本の家族生活と幼児教育・保育の背景の変化）の実施

①労働と家庭の国際的状況、②現代日本の母親たち、③現代日本の幼児教育と保育の 3 つの研究テーマについて、在職中の各種業務を通じて考察を深めた。複数の研究会議を持ち、共同研究者との論文執筆を進捗させるといった成果を挙げたほか、大阪地域でのフィールドワークとアンケート調査を実施するなど、新たなプロジェクトを始動させた。[本報告書 174 頁参照]

2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営およびディスカッサント登壇

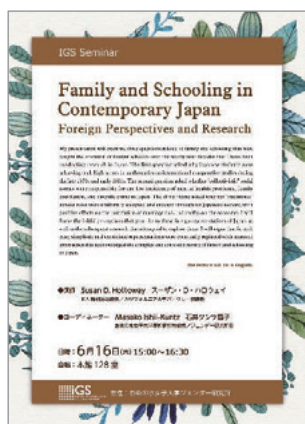
2016 年 6 月 9 日（木）開催の、国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較（Family, Work, and Well-Being in International Perspective）」の企画を担当した。ノルウェー・スタヴァンゲル大学の小野坂優子准教授と京都外国語大学の根本宮美子教授の 2 名を報告者として招聘し、自らは、石井クンツ昌子ジェンダー研究所長とともにディスカッサントとして登壇した。その成果は『IGS Project Series 5 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較』として 2016 年 7 月に刊行された。[本報告書 53～55 頁および IGS Project Series 5 参照]



### 3) 大学院生対象 IGS セミナー講義

2016 年 6 月 16 日（木）に「Family and Schooling in Contemporary Japan: Foreign Perspectives and Research」

（現代日本における家庭と学校教育：外国人研究者の視点と研究）（コーディネーター：石井クンツ昌子）と題する大学院生対象の IGS セミナーを実施し、過去 40 年間の米国における日本研究の視点の変化の様子と、ハロウェイ教授がフィールドワークでの経験を通して獲得した、研究者としての客観的視点に関する講義を行った。[本報告書 71～72 頁参照]



#### 【プロジェクト成果】

本プロジェクトの各種事業を通じて、本学においては、教員をはじめとする研究者、大学院生、そして附属幼稚園、保育園、こども園にとって、研究および教育活動の活性化につながる成果が得られた。

国際シンポジウムにおいては、少子化や子育てといった、現代の日本社会が直面する課題が取り上げられた。また、「幸福」や「ウェルビーイング」といった既存の研究ではあまり目を向けられることのなかった概念に焦点を当てた先進的な企画であった。ジェンダー平等先進国であるノルウェーの男女共同参画の研究や、日本の未婚男性の結婚観・幸福感という新しい視点での研究を進める、中堅世代の、国際的に活躍する日本人研究者の報告を聞き、相互交流の場が得られたことは、本学学生、大学院生、研究者にとって有意義な機会であった。合わせて、今後の、ジェンダー研究所を拠点とした国際的研究ネットワーク構築への展開が期待できる交流を持つことが出来た。

本学教員および大学院生が聴講した IGS セミナーは、国際比較研究に携わる研究者がフィールドワークにおいて直面する、研究者の視点のあり方についての講義であった。ハロウェイ教授自身の経験に基づく、高度な客観性をいかに研究調査の場で実現させるかの示唆に富んだ内容は、教育、心理、社会学を含む幅広い分野研究者にとって参考になるものであった。世界レベルの研究者の研究経験について詳しく聞く機会が提供されたことは、将来を担う若手研究者に対して、大きな刺激と励みになったことであらう。

また、附属幼稚園等の訪問については、関係者がハロウェイ教授と直接意見交換をする貴重な機会が得られたほか、本報告書の研究プロジェクトのページにある通り、附属幼稚園における研究および分析について、さらなる深化と活性化、国際化に向けた指摘を受けることも出来た。

以上の諸点が示すとおり、本特別招聘教授プロジェクトを通じて、グローバルかつ学際的な最先端の知見と教育研究活動の活性化という成果を得ることができた。また、ハロウェイ教授とは、任期終了後も、今後の連携の継続を目指した交流が進められている。

## エリカ・バッフェツリ特別招聘教授プロジェクト実施概要

### 【招聘事業目的と期待される成果】

グローバル女性リーダー育成研究機構に設置されたジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施と、国際的な研究ネットワークの構築を推進する。特別招聘教授はこの両方に寄与する者であり、本学におけるジェンダー研究に、グローバルで学際的な最先端の知見を提供し、教育研究活動の活性化をもたらすことが期待される。

エリカ・バッフェツリ博士の専門領域は東アジア研究で、特に日本における新宗教とメディア・インターネットの関係等に関する研究では、近刊の『*Media and New Religions in Japan*』（Routledge 単著）に代表される、世界的に関心を集める成果を挙げている。また、若年成人層に焦点をあてた宗教信仰に関するジェンダー分析も行なっており、本学においても高水準のジェンダー研究プロジェクトを実施することが期待される。教育面では、独自の研究視点からの知見を提供することで、本学の研究者、院生、学部生に新たな刺激をもたらすことが期待できる。バッフェツリ氏はインドや北欧の研究者とのネットワークも築いていることから、グローバル女性リーダー育成研究機構事業の一つである本学を拠点とした国際的な研究ネットワーク構築への貢献が見込まれる。本学はバッフェツリ氏の所属するマンチェスター大学と長年に渡り協定を結んでおり、特別招聘教授としての招聘が、留学等学生海外派遣プログラムの充実をもたらし、グローバル女性リーダー育成の一層の促進につながる可能性が高い。

### 【エリカ・バッフェツリ特別招聘教授プロフィール】



マンチェスター大学日本学准教授。博士号取得後、日本学術振興会外国人特別研究員（法政大学）、オタゴ大学（ニュージーランド）准教授を歴任。専門分野は現代日本の宗教であり、1970 年代以降に創設された新宗教に焦点を当てた研究を実施している。特に、1980～90 年代のメディアと新宗教の相互作用、宗教指導者、宗教運動の生成と衰退、ラディカルな宗教運動における女性の役割に関する研究実績を持つ。近年の代表的著作は、『*Media and New Religions in Japan*』（2016）、（Ian Reader との共編著）『*Aftermath: the Impact and Ramifications of the Aum Affair. Special Issue of the Japanese Journal of Religious Studies (Japanese Journal of Religious Studies, Vol.39, No.1)*』（2012）、（Ian Reader、Birgit Staemmler との共編著）『*Japanese Religions on the Internet: innovation, Representation and Authority*』（2011）。これまで、国際交流基金、文部科学省を含む諸外国の政府・民間企業から研究教育助成金を獲得し、グローバルレベルでの研究活動を積極的に展開している。日本、ニュージーランド、インド、英国などの研究者との共同研究の経験も多く、研究視点は宗教学、東アジア研究、ジェンダー、家族など多角的である。

【採用期間】 2016 年 9 月 21 日～12 月 20 日

### 【職務内容およびその支援】

バッフェツリ特別招聘教授に依頼した業務は、1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進、2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加、3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告、4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援、および5) 上記活動についての成果報告の5項目である。在職中の業務支援については、ジェンダー研究所スタッフが、事務業務の支援および研究補助を担当した。

### 【プロジェクト概要】

#### 1) 研究プロジェクトの実施

日本の新宗教についての研究に関し、新たに手掛けるプロジェクトを含む、次の3つのプロジェクトを進捗させた。①近代日本の新宗教運動研究調査を進め、阿含宗と幸福の科学という二つの宗教団体へのフィールドワークを実施。衰退期を迎えた団体の戦略に目を向けるという新たな研究テーマ設定が出来た。②女性、宗教、暴力に関する新しい共同研究プロジェクトのためのフィールドワークを行ない、研究の方向性を検討した。③日本の宗教に関する共編著書の刊行作業を進めた。この他にも、セミナーや学会への参加を通し最先端の研究についての知見を得ることが出来た。[本報告書 174 頁参照]

#### 2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総合司会登壇

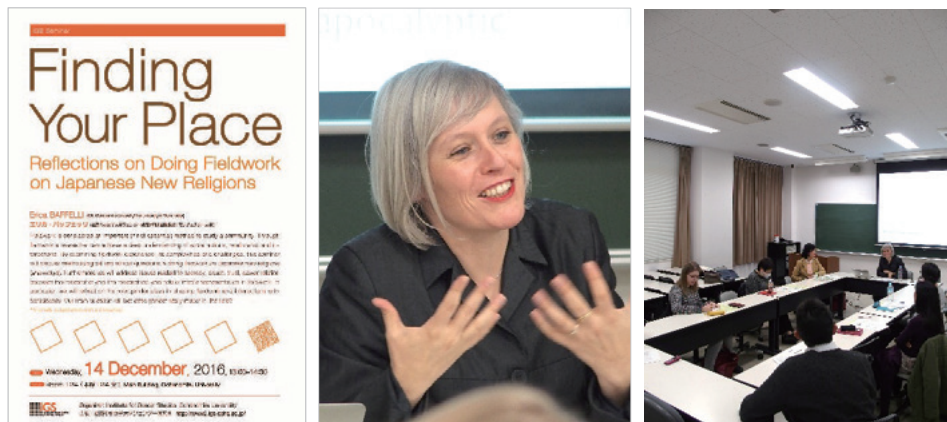
2016年10月19日(水)開催の、国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考 (Women, Religion and Violence in International Perspective)」の企画を担当した。上記研究プロジェクトの②をテーマとした内容であり、共同研究者であるアトリー・セン氏(コペンハーゲン大学准教授)を基調講演者に迎え、ディスカッサントとして松尾瑞穂(国立民族学博物館准教授)、小川真理子(日本学術振興会特別研究員(PD)／大妻女子大学)の両氏が登壇した。その成果は『IGS Project Series 7 女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考』として2016年12月に刊行された。[本報告 56～58 頁および IGS Project Series 7 参照]



#### 3) 大学院生対象 IGS セミナー講義

2016年12月14日(水)に「Finding Your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions (立ち位置を理解する：日本の新宗教フィールドワークからの考察)」と題する大学院生対象の IGS セミナー

を実施した。文化人類学やエスノグラフィー研究者にとっての重要課題である、立ち位置やリフレクションの問題についての、自身の日本でのフィールドワークでの経験を例にした講義と、進行中の研究プロジェクトの紹介を含む内容であった。[本報告書 90～92 頁参照]



### 【プロジェクト成果】

エリカ・バッフェッリ特別招聘教授プロジェクトは、本学の教員をはじめとする研究者、大学院生にとって、それぞれの研究活動の活性化につながる刺激の多いものであったと言える。

国際シンポジウムは、バッフェッリ教授の新しい研究プロジェクトをテーマとするものであった。これは、女性たちの過激な宗教・政治団体への参加という、現在世界中で注目を集めている事象を、既存の研究理論の枠組みに拠らない、新しい視点から分析するという野心的なプロジェクトである。プロジェクト構想に見られる、社会科学の方法論についての批判的熟考の結果は、特に若手の研究者にとって、研究設計の参考にもなるものであろう。そして、そのプロジェクトの共同研究者による基調講演に対し、インドをフィールドにする医療人類学の専門家とドメスティック・バイオレンスの研究者という、2名の異分野の研究者からのコメントを受け、討論をする、というプログラム構成は、学際的な対話による研究の発展を当然必須のものとする、グローバルレベルの研究の先鋭的な姿勢を示しており、そこから学ぶことも多い。

本学教員、研究者および大学院生が聴講した IGS セミナーは、バッフェッリ氏自身の調査研究経験と、文化人類学のフィールドワークの方法論を中心にしたものである。研究内容に、研究者の自己が何らかの形で反映される可能性があることと認識することは、他の社会科学、人文科学分野においても重要であり、聴講した研究者たちに、各々の研究におけるリフレキシビティについての再考を促す機会にもなっただろう。

また、バッフェッリ氏は、上記イベント実施に加えて、フィールドワーク調査、研究会出席、マンチェスター大学から日本に留学している学生のサポートも含めた様々な活動を、精力的にこなしていた。ジェンダー研究所主催のセミナーに出席し討論に参加したほか、研究所の研究者、スタッフたちとの交流も積極的に行い、短期間の滞在ではあったが、研究所全体の活性化にも大きく貢献した。

以上の諸点が示すとおり、本特別招聘教授プロジェクトを通じて、グローバルかつ学際的な最先端の知見と研究所事業活動の活性化という成果を得ることができた。今回の成果の発展として、国際シンポジウムで紹介された研究プロジェクトについての、進捗後の成果報告の機会を、再度本学で持つことが待望される。さらに、今後の国際研究ネットワーク構築関連の展開として、本プロジェクトをきっかけに、バッフェッリ氏の本務校であるマンチェスター大学との学術連携協定に基づく協力関係が、さらに発展することを期待している。

## ラウラ・ネンツィ特別招聘教授プロジェクト実施概要

### 【招聘事業目的と期待される成果】

グローバル女性リーダー育成研究機構に設置されたジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施と、国際的な研究ネットワークの構築を推進する。特別招聘教授はこの両方に寄与する者であり、本学におけるジェンダー研究に、グローバルで学際的な最先端の知見を提供し、教育研究活動の活性化をもたらすことが期待される。

米国・テネシー大学のラウラ・ネンツィ博士の専門領域は近代日本史で、これまで江戸時代末期の女性たちに焦点を当てた研究を展開し、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近刊の *The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko*（単著 ハワイ大学出版）は、歴史学のみならず、ジェンダー研究者からも、日本の女性史についての理解を深めることにつながったとの高い評価を得ている。ネンツィ氏は欧米における研究ネットワークも確立しており、本学においてジェンダー研究所を拠点としたグローバルな共同研究ネットワークの構築に寄与することが可能である。また、ネンツィ氏の研究テーマは、独自の視点を持った大変興味深いものであり、本学の研究者・院生にとって、多くのことを学ぶ機会をもたらすことが期待できる。

### 【ラウラ・ネンツィ特別招聘教授プロフィール】



テネシー大学教授（日本史）。カリフォルニア大学サンタバーバラ校博士（歴史）。研究分野は徳川時代の社会文化史で、特にジェンダーに関心を持っている。近世日本の旅文化、巡礼、幕末の社会、明治維新で女性が果たした役割などのテーマに関する論文を、多数発表している。代表的著書は『*The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko: One Woman's Transit from Tokugawa to Meiji Japan*』（ハワイ大学出版、2015年）、『*Excursions in Identity: Travel and the Intersection of Place, Gender, and Status in Edo Japan*』（ハワイ大学出版、2008年）。これまで、東京大学、京都大学、国立歴史民俗博物館などで研究を行ない、ヨーロッパにおいても英国、スコットランド、イタリアなどで国際的な研究活動を展開している。米国内では、ハーバード大学、プリンストン大学、ペンシルベニア大学などのトップ大学において招待講演をしている。研究視点は歴史、女性学、ジェンダー研究などを取り入れた独創的なものである。

【採用期間】 2016年10月3日～2017年7月31日

### 【職務内容およびその支援】

ネンツィ特別招聘教授に依頼した業務は、1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進、2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加、3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告、4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援、および5) 上記活動についての成果報告の5項目である。在職中の業務支援については、ジェンダー研究所スタッフが、事務業務の支援を担当。

## 【プロジェクト概要】

### 1) 研究プロジェクトの実施

日本の近世、徳川社会の研究として、新規のプロジェクト「After Dark: The Nighttime in Nineteenth Century Japan (日暮れ後：19世紀日本の夜)」に取り組んでいる。テーマは、江戸期日本の夜の闇。夜という時間帯が、文化的、政治的にどんな意味をもっていたかと、それをジェンダー視点から分析する試みである。また、幕末に向けての社会変化の中で、夜の持つ意味が社会的にどのように変わってきたかにも着目する。[本報告書 175 頁参照]

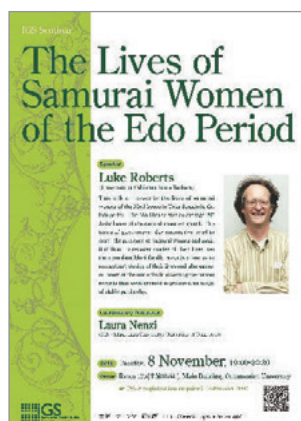
### 2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総合司会登壇

2017 年 1 月 17 日（火）開催の、国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎（Gender, Religion, and Social Reform in the Meiji Period: The Case of Sumiya Koume and Nakagawa Yokotarō）」の企画を担当した。ネンツィ教授と同じく、19 世紀日本の歴史についてジェンダー視点からの研究に取り組んでいる、米スミス大学のマーニー・アンダーソン准教授を基調講演者に迎え、コメンテーターとしてエリック・シッケタンツ（日本学術振興会外国人特別研究員／東京大学）、石井紀子（上智大学教授）の両氏が登壇した。維新後の社会変化は、人々の考えやジェンダー役割をも変えていった。その中で、キリスト教布教も大きな役割を果たしており、元士族の官僚中川横太郎とその妻炭谷小梅の、ふたりの関係の変化と彼らの生き方に焦点をあて、人々の変化を見つめる内容であった。シンポジウムの成果は IGS Project Series の 1 冊として 2017 年夏刊行予定。[本報告 59～61 頁参照]



### 3) IGS セミナー

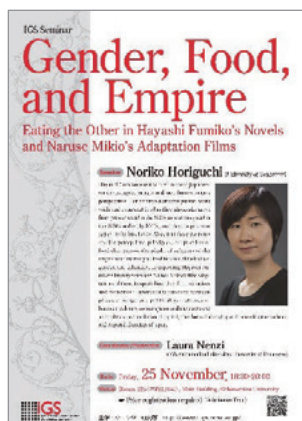
米国で日本関連の研究に携わる研究者 2 名を招聘し、英語によるセミナーを 2 回企画運営した。



#### ①2016 年 11 月 8 日（火）「The Lives of Samurai Women of the Edo Period （江戸時代の武家の女性たち）」

講師：ルーク・ロバーツ（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）

長年土佐藩の歴史研究に取り組んでいる研究者を講師に迎え、土佐山内家の家臣、森家の記録文書から、家父長制度という建前の背後に、どのようなジェンダー構造実態が隠されていたかを読解。[本報告書 80～82 頁参照]



②2016 年 11 月 25 日(金)「Gender, Food, and Empire: Eating the Other in Hayashi Fumiko's Novels and Naruse Mikio's Adaptation Films (ジェンダー・食・帝国:「他者を食べる」物語と記憶(林芙美子の小説と成瀬巳喜男の翻案映画を中心に))」

講師:堀口典子(テネシー大学准教授)

日本の近代文学を専門とする講師を迎え、1920～40 年代の日本の政治経済状況や帝国日本などの集合的なアイデンティティ構築において、「食」がどのような役割をはたしていたのかを、林芙美子の小説と、それを原作にした成瀬巳喜男監督の映画を題材に考察。[本報告書 85～87 頁参照]

#### 4) 大学院講義

2016(平成 28)年度後期の、博士前期課程比較社会文化学専攻歴史文化学コース「歴史資料論特論」を担当。「Gender Issues in Tokugawa Period(徳川時代のジェンダー課題)」をテーマとした英語による講義。江戸時代の女性に関する文献を題材に、歴史研究およびジェンダー史研究の基礎と方法論を学び、研究者としてのスキルを身に付けることを目標としている。文献講読と演習を中心とした、米国大学院式の講義。

#### 【プロジェクト成果】

2016(平成 28)年度のラウラ・ネンツィ特別招聘教授プロジェクトは、ジェンダー研究所事業に学際的な広がりをもたらすものであったと言える。近年、IGS では、所属研究者の専門領域が社会科学を中心としているものになっていることから、開催イベントや研究プロジェクトのテーマも、社会科学系の内容が多くなっていった。そこへ、歴史研究を専門とするネンツィ教授が加わり、その研究プロジェクトのみならず、人文科学系の研究者を招聘してのイベント企画などを進めてくれたことで、ジェンダー研究が本来持つ学際的という特徴が、研究所の活動実績に、より顕著に表れるという結果をもたらした。

そしてまた、この「広がり」という点においては、別の側面での成果も見られた。ネンツィ教授が大学院授業を担当するにあたっては、専門が歴史研究であることも手伝って、ジェンダー関連の専攻ではなく、比較社会文化学専攻での科目が充てられた。これは、ジェンダー研究所の特別招聘教授プロジェクトの貢献が、学内他部局への広がりを持つと明示していると言えよう。また、ネンツィ教授の企画によるセミナーやシンポジウムへは、日本国内で日本史や日本文化研究に取り組む、外国人研究者が多く来場している。本学へ足を運ぶ、新たな研究者層を広げる成果を挙げているということは、ジェンダー研究所の国際的研究拠点としての存在感を高め、ひいては、国際的研究ネットワーク構築へも大きく貢献することになるだろう。

さらに、ネンツィ教授が国際シンポジウムや IGS セミナーに招聘した研究者は、いずれも、独創的な研究視点からの研究成果をもち、それを、惜しむことなく本学で公開発表してくれている。これは、本学所属研究者や大学院生の学びや研究面での刺激ともなる貢献である。

引き続きの採用となる次年度にも、大学院講義や興味深いテーマの国際シンポジウムとセミナーの実施が決定しており、本プロジェクト成果のさらなる充実が確信される。